

スペイン語における事態の分類について

Yamamura, Hiromi
Kyushu University

<https://hdl.handle.net/2324/1932345>

出版情報：イスパニカ. 43, pp.41-52, 1999-12. Japanese Association of Hispanists
バージョン：
権利関係：



スペイン語における事態の分類について

山村 ひろみ

0. はじめに

従来、動詞を用いて表される事態¹⁾はその時間構造に従っていくつかの類に分類されると主張されてきたが、その数、また、各事態が帰属するべき類を決定する際の基準については、いまだ統一的見解が得られていない。その背景には対象とする言語の動詞体系や語彙構造の違い等さまざまな要因があると思われるが、では、スペイン語という特定言語における事態の分類を決める際に有効な基準、また、それに基づき分類した結果はいったいどのようなものになるのだろうか。本稿はこれらの問題を先行研究の成果およびその問題点を踏まえながら検討していくものである。

1. 先行研究

スペイン語における事態の時間構造を考える際、その先駆者として Bello の名をあげることに異を唱える人は少ないだろう。周知のように、彼は動詞を *desinientes* と *permanentes* の二種類に分けた。前者は *nacer*, *morir* のようにそれが完了すると同時に終結する事態を示し、後者は *ser, ver, oir* のようにそれが完了した後も引き続き継続していることが可能な事態を示す²⁾。Bello によれば、この *desinientes* と *permanentes* の違いは、各動詞の *pretérito* による表出の意味するところに影響を与える。すなわち、*desinientes* 動詞の *pretérito* による表出は常に当該事態全体が発話時以前にあることを示すのに対し、*permanentes* 動詞のそれは当該事態の完了した時点、換言すれば、その開始点だけが発話時以前にあることを示すことがあるというのである。この指摘のうち特に *permanentes* 動詞に対するものは重要で、*pretérito* の機能を考える上で大いに参考とすべきものであるが、Bello はこの *pretérito* の意味内容が *desinientes* と *permanentes* という二分類の基準になると説明しているわけではない。

Bello の後、Gili Gaya (1979¹²⁾ も同様の分類を行なったが、その数は

momentáneos, reiterados, imperfectivos(durativos), incoativos, perfectivos とかなり増えている³⁾。それは彼が特に動詞の語彙・意味的相違に注目したためである。Gili Gaya はこれらの類のうち動詞活用形との関連において重要なのは perfectivos と imperfectivos であり、それは Bello の desinentes と permanentes に対応すると述べている⁴⁾。そして Bello よりも断定的に perfectivos な動詞の pretérito は当該事態全体が発話時以前にあることを示し、imperfectivos のそれは当該事態の完了が発話時以前にあることを示すと記している⁵⁾。しかし、これら二類と他の類、すなわち momentáneos, reiterados, incoativos を区別する基準は判然とせず、ただ意味的相違に依拠しているだけである。

ところで、Gili Gaya の分類にはそれまでの分類とは一線を画している点がある。それは事態の時間構造の分析には動詞のみならずその補語まで考慮する必要があると指摘したことである⁶⁾。この重要な指摘は Gili Gaya の後に現われた Bull (1968)の中にも見られる。

Bull (1968)は、動詞の表す事態はその時間構造の中に終結点を設定できるか否かによって cyclic と noncyclic の二種類に分けられるとした上で⁷⁾、次のような指摘をしている。

“There are, consequently, no cyclic and noncyclic verbs. Many stems may label both cyclic and noncyclic events. The act of eating (*comer*), for example, is noncyclic and *comer manzanas* is likewise noncyclic. However, *comer una manzana* is cyclic; action comes to an end because there is an end to the apple.” (Bull 1968:46)

上記の Bull の考えに従うならば、これまで動詞単位に行われてきた事態の分類は新たに動詞句単位に行わなければならぬことになろう。しかしながら、このような重要な指摘をしているにもかかわらず、Bull の分類も厳密な客観的基準を欠いているという点においては、先に見た Bello, Gili Gaya と変わりがない。

この客観的基準の欠如という問題はごく最近の研究にも見られる。Westfall (1995)は、スペイン語の事態を state, activity, semelfactive, accomplishment, achievement の 5 種類に分けているが、その分類は [±static], [±durative], [±telic] といったいくつかの概念的特徴を組み合わせたものにすぎない。以下は、その特徴を基にした Westfall の各類の規定である。

Stative: static, durative

Activity: dynamic, durative, atelic event

Accomplishment: dynamic, durative, telic event with a non-detachable process and outcome

Achievement: dynamic, instantaneous, telic event

Semelfactive: dynamic, instantaneous, atelic event Westfall(1995:33)

Westfall の分類は Bello, Gili Gaya, Bull のそれに比べると、各類の違いがその概念的特徴の違いという形でより客観的に説明できるという点で優れているように見える。しかし、それを保証する各特徴そのものの違いはまさに概念的で客観的基準を欠いたものであり、結果的には、先に見た先行研究と同じ問題を抱えたものといえる。

以上、これまでスペイン語の事態分類がどのように行われてきたかを概観した。その結果、どの分類も当該事態に終結点を設定できるか否かを一つの目安にしていること、しかし、その分類基準はもっぱら当該事態の意味内容に頼ることが多く客観的基準を欠いたものであることが分かった。このような客観的基準を欠いた分類は、ともすれば単なる動詞（動詞句）の意味記述に終わるという欠点を持つ。そこで次節では、スペイン語の事態分類に有効な客観的基準とは何かを考えるために、これまで提案してきた諸説のうち代表的と思われる Vendler (1967) と Garey (1957)を取り上げ、そのスペイン語への応用の是非を検討してみる。

2. スペイン語における事態とその分類基準

2.1. Vendler (1967) に基づく分類

まず、Vendler (1967) から見てみよう。これは英語の動詞句を対象にその事態分類を試みたものであるが、そこで提示された客観的基準のうちもっとも基本的かつ重要なのは *be+~ing* という迂言形式によって表出できるか否かということである。英語の事態はこの基準に従って次のように分類される⁸⁾。

- (1) He is pushing the cart.
- (2) He is drawing a circle.
- (3) *I am loving her.
- (4) #I am reaching the top. ⁹⁾

(1), (2) は *be+~ing* による表出が可能だが、(3), (4) はそれが難しい。Vendler によると、この違いは、前者が時間軸上で連続的に展開する事態を表すのに対し、後者はそのような事態を表さないことに因る。一方、以下に見られるよう

に(1), (2), また, (3), (4)は共起する副詞句の違いによってさらに二分される。

- (1)' For how long did he push the cart ?
- (1)" ?? How long did it take to push the cart ?
- (2)' ??For how long did he draw the circle ?
- (2)" How long did it take to draw the circle ?
- (3)' For how long did you love her ? For three years.
- (4)' At what time did you reach the top ? At noon sharp.

(1) と (2) の間に見られる共起する副詞句の違いは, 前者が特定の終結点を欠いた事態を表すのに対し, 後者は予め決められた特定の終結点を持つ事態を表すという時間構造の違いに因る。また, (3), (4) の違いは, 前者がその長さの如何を問わずある一定期間において真である事態を表すのに対し, 後者はある瞬間ににおいてのみ真である事態しか表さないという時間構造の違いに対応している。Vendler は以上の二つの客観的基準に従って英語の事態を, activity (= (1)), accomplishment (= (2)), state (= (3)), achievement (= (4)) の 4 種類に分けたが, この基準をそのままスペイン語に応用することは果して可能なのだろうか。本稿は, 以下の理由から, それは難しいと考える。

まず, 英語の *be+~ing* に対応する *estar+gerundio* による表出について見てみよう¹⁰⁾。

- (5) *Ignacio está siendo corpulento. (Rodríguez Espiñeira 1990:187)
- (6) Está siendo muy blanda con su hija. (Ibid.)
- (7) *Está/*Estaba/*Estuvo encontrando la cartera.
- (8) Está/Estaba/*Estuvo llegando a la meta.
- (9) Está/Estaba/Estuvo empujando el carro.

(5), (6) はどちらも *ser* を用いているが, この *ser* 文は通常 *state* に分類される。従って, Vendler の基準からすると両方ともに *estar+gerundio* による表出は難しいと予測されるのに, 実際は上の例文が示すように, その実現可能性には違いが認められる。また, (7), (8) は Vendler によれば両方とも *achievement* に分類される事態だが, (7) は *estar* の時制が何であれ *estar+gerundio* による表出が不可能なのに対し, (8) は *estar* が *pretérito* のときしか制約を受けない。一方, Vendler が *activity* に分類する (9) では, そのような時制形式による制約はいっさい起こらない。以上のこととは, スペイン語における *estar+gerundio* による表出の可否には, 何か当該事態の時間的展開以外の要素が関わっていることを示唆するものと思われる。

次に、特定の副詞句との共起を見てみよう。

- (10) En unos minutos estuvo en la calle.
- (11) *Encontró la cartera durante dos semanas.
- (11)' No encontró la cartera durante dos semanas.
- (12) Perdió la visión durante quince días. (Cambio16 No.1250:49)

(10) で用いられている *en unos minutos* という副詞句は、当該事態が完了するのに要した時間を示すことから、先に見た (2)" と同じ意味的特徴を持つものと考えられる。そうすると、この副詞句もその時間構造の中に終結点を持った accomplishment や achievement の事態とは共起しても、それを欠いた state, activity の事態とは共起し難いと予測されるが、実際はそうではない。(10)に明らかなように、一般に state に分類される事態でも同副詞句と共にすることは可能だからである。同様のことは、(11)', (12) でも確認される。これらの例文で扱われている事態はどれも Vendler の achievement に分類され、通常、期間を示す副詞句とは共起しないと考えられているものである。それにもかかわらず、否定辞のついた (11)' は *durante* を伴った期間副詞句と何の問題もなく共起することができ、また、(12) は、否定辞という特別の要素の介入なしでも期間副詞句との共起が可能となっている。このような事実からすると、スペイン語の事態分類では、特定の副詞句との共起の可否は必ずしも有効な基準にはならないということになる。

以上、Vendler (1967) で提案された事態分類の基準がそのままスペイン語に応用できるか否かを見てきたが、結果的に、それにはいろいろな問題のあることが分かった。次節では、フランス語の動詞句を対象にしてその事態分類を試みた Garey (1957) のスペイン語への応用を検討する。

2.2. Garey (1957) に基づく分類

本節で扱う Garey (1957) の基準は、Vendler のそれに比べるとかなり簡単なものである。というのも、それはすべての動詞に対して一様に起こる形式、すなわち、imperfecto と pretérito/perfecto compuesto の表出内容の相関関係に基づくものだからである。以下を参照されたい。

Si on verbait, mais a été interrompu tout en verbant, est-ce qu'on a verbé?
(筆者注：下線の施された verb の部分には対象となる事態が入る。)

上記テストの文字通りの意味は「imperfecto の表出する事態が中断されたとき当該事態の perfecto compuesto による表出内容は真か偽か」ということであ

るが、今これをスペイン語とフランス語の時制体系の違いを考慮しつつ、スペイン語に可能なより単純な形に言い換えるならば、「imperfecto の表出内容は pretérito の表出内容を包含するか否か」ということになろう¹¹⁾。

Garey は、上のテスト結果が肯定のとき当該事態は atelic であり、否定のときには telic であるという事態の二分類を提案した。以下は、それをスペイン語の事態に適用した結果である。なお、コは imperfecto の表出内容が pretérito の表出内容を包含することを示し、ダは包含しないことを示す。

- (13) Empujaba el carro. \supset Empujó el carro. [atelic]/activity
- (14) Dibujaba un círculo. $\not\supset$ Dibujó un círculo. [telic]/accomplishment
- (15) La amaba. \supset La amé. [atelic]/state
- (16) Llegaba a la cumbre. $\not\supset$ [telic]/achievement

(13)～(16) はそれぞれ Vendler の 4 分類に対応する事態である。Vendler によれば、事態は *be+~ing* による表出の可否によって、state/achievement と activity/accomplishment の二つに分けられたが、Garey の基準に従うならば、それらは state/activity と achievement/accomplishment という異なる二グループに分けられることになる。

スペイン語を対象とした場合、Garey (1957) の提示した事態分類は pretérito による表出が不可能な少数の事態を除くほとんどの事態に応用できる点で、Vendler のものよりは有効性が高いと思われる。しかし、問題がないわけではない。Garey の分類によればすべての事態は telic か atelic のどちらか一方に属すことになるが、同じ atelic の中には Vendler のいう state と activity が、また、telic の中には Vendler の accomplishment と achievement が何の区別もなく振り分けられることになるからである。確かに、先にも見たように、state と activity の違い、また、accomplishment と achievement の違いを厳密な客観的基準によって示すのは難しい。しかし、だからといって、atelic、あるいは、telic という同一類内に分類された事態間にある直観的相違を無視するわけにはいかないだろう。では Garey の基準を尊重しつつ、この問題を解消するにはどうしたらよいのか。本稿は、そのためには Garey (1957) の基準と Vendler (1967) の基準を併用する必要があると考える。しかし、その併用は無秩序に行われるべきでなく、次節で述べるような手順を踏まねばならない。

2.3. Vendler (1967) と Garey (1957) の併用による分類

まず、各事態は Garey の提示したテストによって、atelic あるいは telic のど

ちらかに区分される。その後、当該事態はその質的特徴によって、atelic のものは state または activity に分類され、telic のものは accomplishment または achievement に分類されることになる。この Garey のテスト以後に行われる分類の基準となる各事態の質的特徴は Vendler の4分類に従つたもので、次のようにまとめられる。

state と activity はともに、その時間構造の中に予め特定された終結点を持たないという共通点を持つが、その質的特徴は異なっている。それがもっともよく示されるのは、各事態の imperfecto による表出内容においてである。

(17) La amaba. [atelic]/state

La amó: e_1 (当該事態の成立)

$e_1/t_1 \subset s_{1+n}/t_{1+n}$

(18) Empujaba el carro. [atelic]/activity

Empujó el carro: $e_1 + \dots e_n$ (当該事態の成立)

$e_1/t_1, \dots + e_{n-1}/t_{n-1} + e_n/t_n$

(17)が示すように、state の imperfecto は pretérito が表出する当該事態の成立 ($=e_1$) 以後の結果状態 ($=s_{1+n}$) を表すが、この結果状態の継続にはいかなるエネルギーも必要ではない。つまり、(17)の imperfecto 文が真であるためには、ただある時点 ($=t_1$) で [(él) amarla] という事態が成立してさえいればよいのである。他方、activity の imperfecto が表すのは、(18)が示すように、pretérito が表出する当該事態の成立の累積 ($=e_1/t_1 + \dots + e_n/t_n$) と考えられる。従って、(18)が真であるためには、各時点 ($=t_1, \dots, t_{n-1}, t_n$) で当該事態が成立していなければならず、その結果、activity 事態の構成素の中には当該事態を成立させるに足るエネルギーを持った指示物が示されている必要がある。

その時間構造の中に予め特定の終結点が設定される accomplishment と achievement の質的特徴の違いもまた、imperfecto による表出の意味するところによって説明される。

(19) Dibujaba un círculo. [telic]/accomplishment

(20) Llegaba a la cumbre. [telic]/achievement

今、(19)、(20)の imperfecto 文を動詞部分とその補語部分に分け、動詞部分にのみ Garey のテストを適用してみると、(19)の回答は肯定であり、(20)のそれは否定であることが分かる。このテスト結果からすると、(20)のような achievement 事態の telicity は絶対的で動詞そのものが担っているが、(19)のような accomplishment 事態の telicity は絶対的なものではなく、それを担ってい

るのも動詞以外の要素、つまり、その補語部分であることが分る。本稿の考える accomplishment と achievement の質的特徴の違いは、まさにこの点にある。

しかし、Garey の基準と Vendler の基準の併用によるスペイン語の事態分類もまた万全なものではない。Garey の基準に従って atelic と telic に分けた後の分類はこれまで本稿が批判してきた概念的なものといえなくはなく、また、たとえ Garey と Vendler の基準を併用しても、その分類があいまいとなる事態は存在するからである¹²⁾。このような問題点は今後の課題としたい。

3. 「類シフト」という考え方について

さて、事態分類をめぐる最近の研究では、しばしば「類シフト」という考え方用いられる。本稿では、最後に、この考え方をスペイン語の事態分類に応用することの是非を検討してみたい。

(21) (= (5)) *Ignacio está siendo corpulento. (Rodríguez Espiñeira 1990:187)

(22) (= (6)) Está siendo muy blanda con su hija. (Ibid.)

Rodríguez Espiñeira (1990:187) は、同じ *ser* 文である(21),(22)において *estar* +gerundio による表出の可否に違いが見られるのは、(22)では *state* から *non-state* への類シフトが起こったのに対し、(21)ではそのようなシフトが起こらなかったからであると説明している。このように「類シフト」という用語は、当該事態が本来それが分類されたグループでは容認されないような現象を起こすときに持ち出されるのが普通である。以下は Westfall (1995:173) の例文だが、ここでも「シフト」という用語が使われている。

(23) Al ver a su hijo estuvo feliz. (Westfall 1995:173)

Westfall の解釈によれば、(23)では *state* から *inceptive achievement* へのシフトが起こっているという。本来 *state* に分類される事態の *pretérito* による表出は当該事態の終結を示すはずなのに、(23)ではそれとは逆の当該事態の成立が示されているからというのがその理由である。このような「類シフト」という考え方は果してスペイン語の事態分類にとって有効なものなのだろうか。

まず、Rodríguez Espiñeira の主張から見てみよう。彼女の考えに従うならば、*state* に分類された事態で *estar*+gerundio による表出の可能なものはすべて *non-state* にシフトしたということになるが、それは単なる結果論にすぎず何の予測性も持たないもののように思われる。本稿の見方に従うならば、(21), (22)はともに Garey のテストについて肯定的であり、また、Vendler の基準からも同じ質的特徴を持つと判断されることから、どちらも同じ *state* に分類さ

れる。しかし、無視できないのはこれら二文の形容詞の間にある意味的相違であり、本稿は、結果的に、それが *estar+gerundio* による表出の可否を決定していると考える。(21)の *corpulento* は主語に固有の性質を示すもので変化の可能性はないが、(22)の *blando* は主語に対する話者の評価を示すものなので、その都度変化する可能性がある。そして、この変化の可能性というものが *estar+gerundio* によって表出される事態に共通の特徴だとすると、(22) が同形式によって表出されたのは、結局、その補語が変化の可能性を示す形容詞 *blando* だからということになるのである。

一方、Westfall の問題は、*state* は開始点も終結点も持たず、また、*pretérito* は常に当該事態の終結を示すということを前提とした点にある。つまり、彼女はこの前提に反する例を説明するための手段として「類シフト」を利用しているのである。しかし、すでに Bello, Gili Gaya の研究でもみたように、*state* の *pretérito* が当該事態の成立を示すというのは周知の事実である。だとすれば、*pretérito* の機能についてはまずこの事実に基づいた分析が行われるべきなのではないだろうか。また、Westfall の解釈では、シフトの結果 *achievement* に分類された事態とシフトをまったく受けずに *achievement* と分類された事態との間にある質的特徴の違いがまったく考慮されていない。言い換えるならば、この二種類の事態の共通点は、ただその *pretérito* による表出が当該事態の成立を示すということだけであり、見方を変えれば、それこそまさに *pretérito* の機能に他ならないと考えることもできるのである。

以上、「類シフト」という考え方を見てきたが、それには問題の多いことが分かった。このことから、本稿は取りあえず、スペイン語の事態分類に「類シフト」という新たな概念を導入することは有効ではないと考える。

4. まとめ

これまでの考察結果は以下のようにまとめられる。

- Bello, Gili Gaya, Bull, Westfall に代表されるスペイン語の事態分類はいずれも当該事態の時間構造の中に終結点が設定できるか否かを問題としてきたが、それを決定するための客観的基準は提示されることがなかった。
- スペイン語の事態分類の客観的基準を求めて、Vendler (1967) の基準と Garey (1957) の基準の有効性が検討された。その結果、スペイン語の事態分類にはこの二つの基準の併用が必要であること、そして、それを適用する際には、まず、Garey の基準によって当該事態を *atelic* と *telic* の二つに

分類し、その後、Vendler の基準に従って state, activity, accomplishment, achievement の四つに細分することが有効であることが示された。

- ・最近、事態分類においてよく用いられる「類シフト」という考え方は、少なくともスペイン語では有効でないことが示された。

注

- 1) 本稿では動詞句とその主語からなる出来事（行為）・状態を総称して事態と呼ぶ。また、その時間構造とは、スペイン語文法では通常 modo de acción, また、一般言語学では Aktionsart, situation type 等と呼ばれるものを指す。
- 2) Cf. Bello (1981), p.401. 以下、Bello に関する記述は同ページに拠る。
- 3) Cf. Gili Gaya (1979¹²⁾, p.147.
- 4) Cf. Ibid., p.148.
- 5) Bello と Gili Gaya の態度の違いは、前者が「permanentes 動詞の pretérito は当該事態の完了が発話時以前にあることを示すことがある (“a veces”)」という表現をしているのに対し、後者はそのような保留表現を用いていない点に明らかである。Cf. Ibid., pp.148–149.
- 6) Cf. Ibid., p.61.
- 7) Cf. Bull (1968), pp.44–47.
- 8) 以下、Vendler の基準に関する例文は Vendler の論文で扱われたものをそのまま採用している。
- 9) この文は非文ではない。しかし、Vendler は、それは当該事態の連続的展開を表せないという点で(1), (2)とは異なると解釈している。#はその違いを表したものである。Cf. Vendler(1967), p.104.
- 10) 以下のスペイン語例文中、末尾の括弧はその出典を示し、それがないものは筆者の作例である。なお、作例の文法性はスペイン語話者によって確認されている。
- 11) この言い換えで “mais a été interrompu tout en verbant” の部分が省略されたのは、スペイン語には自然現象を表す事態のように、その意味内容からこの構文を認めないものがあるからである。
- 12) 例えば, [(él) leer el periódico] という事態は、その pretérito による表出が en~, durante~ のどちらの副詞句とも共起可能なことから、accomplishment, achievement の両方に分類される可能性がある。

参考文献

- Bello, A. (1981): *Gramática de la lengua castellana*, ed. por Trujillo, R., Tenerife: Instituto universitario de lingüística Andrés Bello.
- Bull, W. (1968): *Time, Tense and the Verb*, Berkeley : Univ. of California Press.

- Garey, H. B. (1957): “Verbal aspect in French”, *Language* 33, pp. 91– 110.
- Gili Gaya, S. (1979): *Curso superior de la sintaxis española*, Barcelona: Bibliograf.
- Rodríguez Espiñeira, M^a. J. (1990): “Clases de ‘Aktionsart’ y predicciones habituales en español”, *Verba* 17, pp.171– 201.
- Vendler, Z. (1967): “Verbs and times”, *Linguistics in Philosophy*, pp.97– 121, Ithaca : Cornell Univ. Press.
- Westfall, R. H. (1995): *Simple and progressive forms of the Spanish past tense system: A semantic and pragmatic study in viewpoint contrast*, Ph.D.dissertation, Univ. of Texas at Austin.

Sobre la clasificación de las situaciones en español

YAMAMURA Hiromi

Como es bien sabido, cada “situación” se clasifica según el tipo de la estructura temporal que tiene. Sin embargo, no hay ningún consenso en cuanto al número de los tipos ni al criterio según el cual se clasifican las situaciones. Este ensayo tiene como objetivo investigar cómo debe ser el criterio para clasificar las situaciones en español y cómo se clasificará cada situación según el criterio mismo. El resultado se resume como sigue:

- Según los estudios anteriores por Bello, Gili Gaya(1979¹²), Bull(1968) y Westfall(1995), las situaciones en español se clasifican principalmente por el criterio de la existencia o no del punto final en su estructura temporal. Pero este criterio se basa generalmente en los caracteres significativos de cada verbo y resulta que es muy difícil decidir objetivamente a qué tipo pertenece cada situación.
- Para clasificar objetivamente las situaciones en español, es muy útil usar a la vez el criterio propuesto por Vendler(1967) y el criterio propuesto por Garey(1957). Es decir, primero, según el criterio de Garey, todas las situaciones se dividen en el tipo ‘atélico’ y el tipo ‘télico’. Y después, según el criterio de Vendler, las situaciones del tipo ‘atélico’ se dividen en el ‘state’ y el ‘activity’, y las situaciones ‘télicas’ se dividen en el ‘accomplishment’ y el ‘achievement’.
- Entre los últimos estudios sobre la clasificación de las situaciones, hay unos que insisten en la eficacia de una idea llamada “desplazamiento del tipo de situación”, pero no creemos que sea útil aplicarla al español.